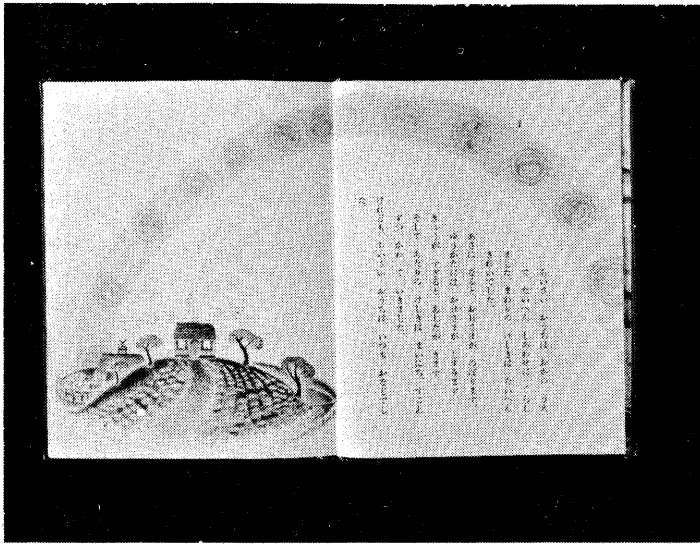


子どものおひさま

津守 房江



一枚の絵から

子どもたちが毎日の生活の中で書いた絵は、どれも大切に捨てられない。大作も小さな紙きれも大事にためているうちに、十年以上もたつとおびただしい量になった。数年前からこれらを一枚一枚じっくりと眺める時をもつようになった。「この絵を書いた時、この子はどんな気持ちだったのだろうか?」と思いめぐらし、書いたあとをたどり、そのころのようすを考え、生活記録を読み返してみた。これは、母親としての反省の時というより、共に生活をした者が、その時気付かなかった多くのことを新たに思い出す、発見の時であった。絵の中に表われていることが、言葉にもまた、遊びの中にも表われていることに気付かされた。子どもが感得した世界を、ある時は遊びの中に、ある時は言葉や歌に、ある時は絵にと、意識的に表現したり、無意識のうちに表わしたりしているのだと考えた。

これらの絵の中で、Yが二歳五ヵ月の時作った太陽の切り紙は、私にとって大切な「一枚の絵」である。Yは折り紙を持ち、はさみで紙のまわりに直角にきざみを入れ、紙を少しずらしてまた、はさみを入れる。これを繰り返して、

折紙の周囲全部に細かい切り込みを入れたものである。これをYは「おひちゃま」といって二枚続けて作る。私はこれ

を作っているYのそばにしながら、その時形が多少とも太陽に似ているので、Yがその形に対して「おひちゃま」と言ったのだと思っていた。しかし、私自身同じように紙を切ってみると感じ方は違う。その形に対してではなく、繰り返しはさみで切っていく、ぐるりと紙のへりを一周する。その繰り返しと回転の動きのイメージに「おひちゃま」と命名したのではないかと思う。このことは、子どもの感得した世界を考えるうえで大切なことと思う。子どもの絵には、たくさん太陽が登場する。そして、それが「おひさま」と呼ばれることも興味深い。この生き生きとした太陽のイメージをとらえることはむずかしい。絵に、遊びに言葉に、表われたものを重ね合せ考え合せていくと、とらえ難いものの姿を少しく浮び上らせることができるであろう。

はじめてのヒトと太陽

Yのはじめて作った「おひちゃま」で、この時の太陽のイメージを私たちは知ることができる。だがもっと小さな赤ちゃんはどんな感じをもっているのだろうか。あの太陽

の光の中できげんよく出す「ウククン、ウククン」という声はその一つの表現であろう。

ウォルター・デ・ラ・メアは、子どものために書いた旧約聖書物語（阿部知二訳・岩波書店）ではじめて作られたヒト、アダムの目をさますところを次のように書いている「……かれが目をひらくと、日の光は窓をとおすようにきらめいて射しこんできて、心はよろこびとおどろきで、いっぱいになった。かれは けものや鳥や風や水の声を聞き、指は花々にふれた。日の光と熱をからだじゅうにあびてまっすぐに立ち、手足をうごかし、両うでを頭の上にさした。……」デ・ラ・メアは子どものころ、自分が旧約聖書を読んだ時、心にあらわれた光景を思い出しながらこの作品を書いたということである。ちりの混沌よの中にいのちをふきこまれヒトが形作られたと旧約のころの人は考える。このヒトがはじめて目をあけた時、このように感じただろうと詩人は感じている。小さな赤ちゃんが母の胎内の混沌の世界から光のある地上に生まれ出てきた時と似ているのではないか。「心はよろこびとおどろきで一ぱいになり」まわりの物に手を触れ、「日の光と熱をあびてまっすぐ立ち上がる」。太陽はそのようなものとデ・ラ・メアは感得

しているのだと思う。

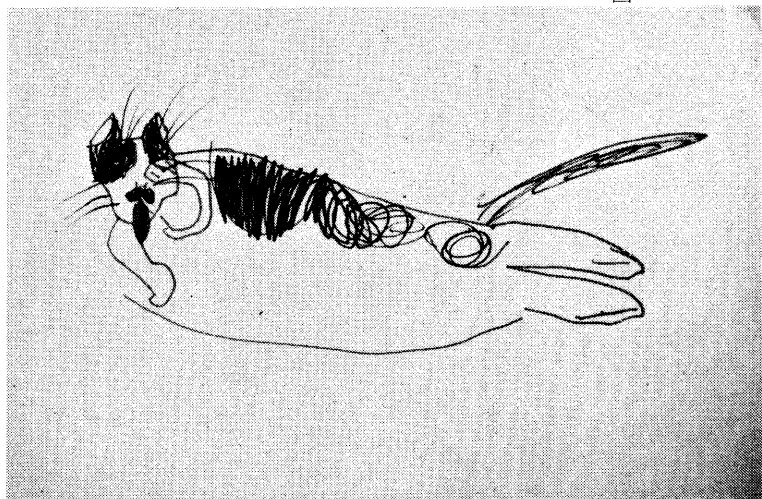
Yのかいた絵の中の太陽と飛翔

Yが六歳八ヵ月の時にかいた六枚の絵の連作は、子どもの心が回転し、立ち上がり、光を沿びて飛び立つプロセスを示している。その時Yは熱が出て旅行に行けなかったので母と二人で留守番をしていたが、少し落ち着いた時枕元の画用紙に書きはじめる。

自分のペットの猫がぐにやりとすわっている絵(図1)を書く。「アッそうだ、お嫁さん書こう」といって猫のそばにお嫁さんを書く(図2)。すると心に喜びを感じ、心が回転しはじめるのだろうか、輝いた冠をかぶった鳥をかき目を黄色にぐるぐるとぬる。(図3)次にふわふわと飛び上がりそうな鳥をかき(図4)次には羽根をひろげ飛び立ち、(図5)翼は光の粉をあびている鳥(図6)を書く。

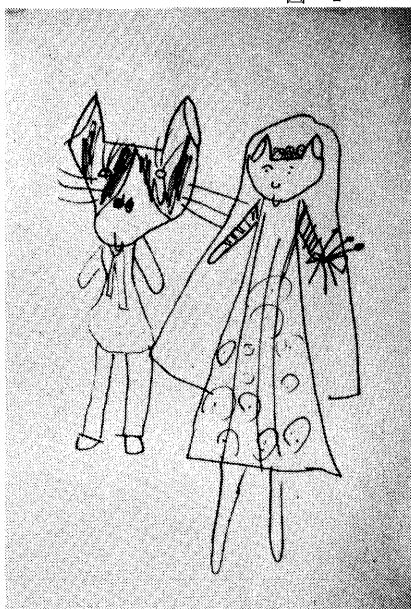
この絵を書いた次の日すっかり熱も下がり、「あたし、ゆうべ夢みたよ。すごく背が高くなってトート(父)カーカ(母)が飛行機で来て、それよりも高いの」といっている。小学校に入学して間もない充実した時期に、Yの心は「よろこびとおどろきでいっぱいになり」いろいろなものにふ

図 1





☒ 2



☒ 4



☒ 3

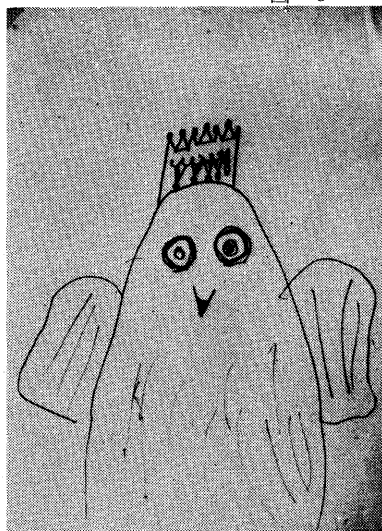




图 5

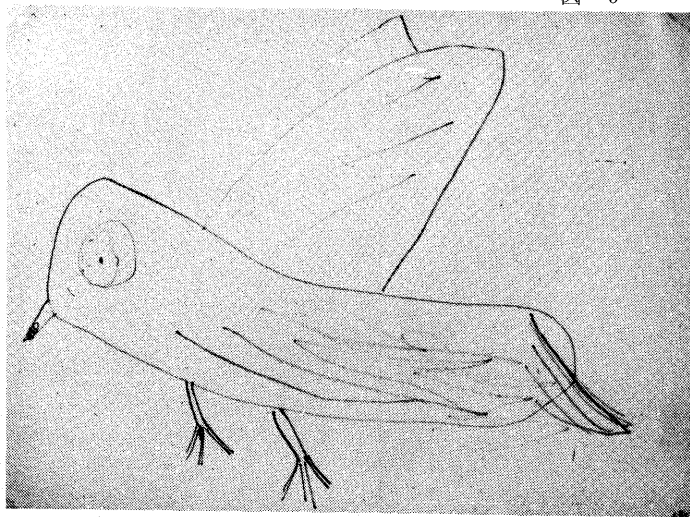


图 6



れ、「日の光と熱をからだじゅうにあびてまっすぐに立ち」
(デ・ラ・メア) 飛び立つ思いを経験していたのであろう。
この連作の前後には、ちようや鳥のテーマの絵が数多く出てくる。折紙で切ってはつちようのことを、「ちようちよとおひさま作ったの」といつているが、オレンジ色のちようの中に、光をあびるちようとおひさまも一緒に見ているのであろう。

童話の中で

「図書館ですばらしい本をみつけたから、おかあさんに借りてきてあげた」といいながら小学校三年生の子どもが、佐藤さとする作「おばあさんのひこうき」(小峰書店)を持ってきた。一人暮しのおばあさんが家に舞い込んだちようを見て、ちようの羽根のように美しい模様を編もうと夢中になる。何もかも忘れて編んでいくうち、編みかけの羽根はピクピク動き出し編み進むうち浮かび上がってしまう。やつとの思いで編み上げて、おばあさんはこの羽根でひこうきを作って月の光の中を空を飛んで孫の住む家の上まで行く。おばあさんはその後一人暮しをやめ、好きな編み物もやめて、孫と一緒に暮すという話である。複雑な模様を編もうと熱中

するおばあさんのことを、子どもは「すごいねー、うちのおばあちゃみたいでしょ」という。「本当」ときょうだいたちは共鳴して、おばあさんの熱気と技術に感心する。おばあさんと空を飛ぶことは結びつかないようだが、何もない平凡なおばあさんが、一人である時思いがけない才能を見せて、老年に新しい自分の世界にはいることは私たちの見ききするところである。平凡に見えながら、子どもと共通する素朴さを持ち続けているこんなおばあさんは、飛翔することができるのであろう。この作品で、おばあさんらしく、やわらかい月の光の中を飛んだのがとてもいい。光に向かつて成長するのは、子どもだけではなく、一生涯のこととして考えることだと思う。

「おばあさんのひこうき」の中で、おばあさんが示す熱心さが飛び立たせるのであるが、このことはジェームズ・バリの『ピーターパン』の中に次のように書きあらわされている。「あの夕方のピーターのように飛ぶことが出来るとがむしろに信じてしまえば、多分私たちだって飛ぶことが出来るかもしれません」私たちが飛べないのに鳥が飛べるのは、ただ鳥が飛べるという完全な自信を持っているからにすぎません。なぜなら自信を持つことは翼を持つことに

なりますから」(木多顯彰訳・新潮文庫) といっている。がむしろな自信は、速度の早い回転のイメージであり、これが飛翔のイメージへと向かう。ピーターパンは物語として子どもが読むには、なかなか苦労する作品である。しかし作品としてでき上がる前に、バリが自分の可愛がった知人の子どもたちと一緒に公園で妖精の国の冒険ごっこをし、この遊びは次から次へと何年にもわたって続き、こんな中からピーターという性格が形作られたということである。

(石井桃子訳・福音館書店・ピーターパンとウェンディ)

作品がまず作られたのではなく、体を使つての遊びから出発したということは、どんなにか作者が子どもと共通のイメージをもったことであろうと推察できる。成長する子どもと長く一緒に遊びながら、バリの中にできた成長を見ることができると。

絵本の中で

絵本の中に太陽をたずねる時、くり返しはなしが浮かんでくる。これは絵本の中で同じような行動や場面がくり返し出てくるものである。たとえば「三びきのやぎのがらがらどん」でぶくろ「大きなかぶ」わたしとあそんで「おか

あさんだいすき」等々、思いつくだけでも非常にたくさんある。このくり返しは上昇のイメージとなり、話そのものが単純なだけにくっきりと浮かび上って、子どもの心をとらえる。このことは24回保育学会の論文抄録に少しく書いたものである。こんなくり返しはなしの中で他の作品と違うところのある浜田広介の「こぶたのとことこ」について触れてみたい。これは仔豚のはじめてのおでかけを次のように書いている。(童心社「おはなしのほん」より)

「……よいおてんきでございます。

おにわをとおってまいります。

めんどりさんもみています。

ごもんをとおってまいります。

いぬがだまってています。

きのしたとおってまいります。

からすがあかあみています。……中略

ぶうぶうさんべんみいまわり

それからこんどはどうしよう……中略

すこしおやすみいたしましょう。」

これはゆるやかな回転であり、きわだった上昇のイメージはない。むしろ、すとおかあさんのひざにすわって

いるくたびれた仔豚で話は終わる。こんな回転は輝やかしさはないが、ゆっくりとしたリズムが無理なく、日常的なものだと思う。太陽は絵の中にも出てこないで、一行「よいおてんきでございます」とあるだけであるが、それだけで暖かな日ざしの中の仔豚のさまよいが感じられる。これに対して、大きなスケールの回転をするものとして、バージニア・パートンの「せいめいのれきし」(石井桃子訳・岩波書店)。宇宙生成の過程をドラマのように転回する舞台としてみせ、時の経過のリズミカルな、ら線の先に、今という時が存在することを教える。

「これからあとは、あなたがたのおはなしです。その主人公は、あなたがたです。ぶたいのよういはいできました。時は、いま。場所は、あなたのいるところ。……」このような宇宙のリズムと、小さな「こぶたのとことこ」のリズムは、共に一つとなって一人の子どもの心に、その子のリズムを作るのであらう。

おわりに、

私たちは今まで、子どもの心が太陽を浴びて回転し、上昇し時には飛翔するさまを絵や生活や児童文学の中に見て

きた。それは、成長の過程での子どものいづく成長感といふことができる。樹々がなぜ太陽の方に向かって成長するのだろうか不思議がるのと同じように、人はなぜ光に向かって成長するのだろうかと感嘆する。とはいえ人の飛翔はいつでも輝かしいものとはかぎらない、時には傷つき混沌の中をさまよう、その混沌をつきぬけた時、やはり成長するものの喜びがある。

子どもにとって太陽というと、まず身体的健康にとっての大切さが考えられるが、人の精神の奥深いところに大きな影響をもっていて、人の成長を支えるものであると思う。これは私のもつ太陽のイメージでもある。人の成長のリズムという自然の中で最も神秘的なものをくるわせたり、押しとどめたりしないように願っている。

見出しカットは、私の好きな太陽の絵のひとつです。

「ちいさなおうち」(岩波書店) より